

創建

そうこん

2014・3・25 VOL.48 NO.4 (通巻149号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

- 巻頭言：出村克宣・1
 学術研究報告会特別講演聴講報告（藤森照信先生）・2
 第56回日本大学工学部学術研究報告会・3
 大学院特別講義聴講報告（石田秀輝先生）・4
 大学院特別講義聴講報告（遠藤勝敏先生）・5
 修士学位論文発表会／卒業研究発表会・6
 学術発表／教室ニュース・7
 卒業式・修了式の表彰者／卒業設計作品展・8

国際会議などのため海外に出かける機会が多かったころ、「どこの国がよかったですか?」、「新しい技術に出会いましたか?」などとよく質問された。そんな時には、「所変われば品変わる」と答えていた。

ベルギーでは、教会の木製の梁をコンクリートで補修していた。しかし、下から梁を見上げて木製にしが見えないので驚いていると、梁の上の方から腐朽している箇所を取り除いて、鉄筋を入れてコンクリートを打設していた。スウェーデンでの国際会議では、そこに在住の外国人教授の自宅を訪問した。スウェーデンでは大学までの教育費が無料なので、子供が大学を卒業したら、税金の安い国で職を探すことにしていると話していた。

ある時、ノルウェーで会議の後、一日だけ日本に帰国し、翌日、中国桂林に出発という旅程があった。ノルウェーでは、フィヨルドの船旅をする機会があり、そこには度々某国の潜水艦が出没すると聞いた。水深の深いフィヨルドでは、ある水深で水の密度が変わり、音波が反射するため、探索装置が働かない。潜水艦は音波の届かない水中を潜航して越境していたらしい。後日これが発覚したのは、潜水艦が故障して浮上したからである。

桂林でも川下りをする事になり、山水画の世界を肌で感じる事ができると船に乗った。周囲の山々は絵の通りであり、水は澄んですばらしい船旅であった。ただ、川底には、捨てられた欠けた茶碗や皿の破片が沈んでいた。そして、絶景が風景に変わった。アルプスの少女ハイジにでてくるような緑輝く山肌と真っ青な水をたたえたフィヨルドを見た二日後に、山水画の世界に飛び込んだが、同じ船旅でも、情景はこんなにも違う。

旧ソ連邦崩壊直後のモスクワで国

際会議が開催された。その開催案内の時にはソ連邦は存在しており、会議場は避暑地にある要人用施設という触れ込みであった。しかし、冬の開催にも関わらず暖房は止められ、毛布だけで一夜を過ごした。そこで、ドイツの友人とモスクワ市内のホテルに宿を取ることにした。ホテルに着くと、各階の入り口がフロントになっていて、個人が各フロアーを借り切り、部屋貸しの営業をしていた。

西ベルリンでの国際会議に出席した時、東ドイツの貨幣は「アルミチップス」と呼ばれているという会話があった。その意図がつかめないでい

多くのことを 学んでほしい

教授 出村 克 宣

たが、帰国して約一箇月後にベルリンの壁が崩壊して両ドイツが統一され、当時、東ドイツの貨幣価値がなくなっていたことに気付いた。昔の体験ではあるが、世の中はこんなにも変化に富んでいる。そして、科学技術についても広い視野を持って理解する必要があると感じた。

科学技術の利用が社会に何らかの影響を及ぼすとき、「技術が未熟なのか、技術を使う社会や人間、政治などの判断が未熟なのかを問う必要がある」との指摘がある。

例えば、割り箸は間伐材の有効利用を目的とした我が国の優れたリサイクル文化の現れである。間伐材は、植林した木を大きく育てるために、間引きされたものをいう。しかし、割り箸の便利さから、消費量が増大し、いかに安く大量に提供するかということになった。その結果、材料調達のために近隣諸国の森林環境を

破壊するに至っている、という話を聞いた。こんな時、経済活動からの要求が環境破壊を招いているにもかかわらず、割り箸をつくる技術が環境破壊の原因であるかのように説明されることがある。

世界の物理学界の最長老といわれたマックス・ボルンは、原子爆弾の開発に携わった弟子たちに向けて次の言葉を残しているという。「利口で有能な学生を持ったことは満足であるが、彼らのclevernessがもう少し少なく、wisdomがもう少し多ければ、どんなによかったかと思う。彼らが私から学んだのが研究の方法だけだったとしたら、それは私の責任だと思う。いまや、彼らのclevernessが、世界を絶望的な状況に陥らせている。」clevernessは利口さ、巧みさ、器用さ、巧妙さ、wisdomは賢明であること、分別、知恵、英知、見識などと訳される。

この言葉は、工学技術者であっても、科学技術の利用が社会に及ぼす影響を見定める能力などの素養を身に付けなければ、社会に貢献できないことの指摘である。だから、工学系大学の教育においても専門分野だけでなく、その周辺の知識の習得や教養教育にも重点を置かなければならない。

先日、ある新聞に、日本から海外留学する若者が減少しているという記事が掲載されていた。前述の体験がその後どのように役立っているかは分からない。しかし、異文化に触れそれを肌で感じた経験は、物事を多面的にとらえることを教えてくれたように思う。

もちろん、国内旅行でもさまざまな体験ができる。それが無理ならば読書がある。異文化ばかりでなく、過去を知ることでもできるし、様々な考えを学ぶこともできる。学生諸君には、大学生活を通じて、多くのことを学んでほしい。（工学部長）

日本大学工学部学術研究報告会 特別講演聴講報告

「自然素材と手仕事を生かした藤森流建築の作り方」(藤森照信先生)を聴講して

4年次生 伊藤 隼

平成25年12月14日、藤森照信先生（工学院大学教授・東京大学名誉教授）による講演、「自然素材と手仕事を生かした藤森流建築の作り方」が行われた。建築家として活躍するかたわら、建築史家として多くの名文を著しているらしい先生の語りは、のっけからグイグイ引き込まれずにはいられない魅力あふれるものだった。

講演で最初に紹介されたのは、「岩の家」・「泥のモスク」・「投入堂」、先生が感銘を受けたという3つの建築である（図1）。荒々しい岩、大地とつながる土、そして崖に添えられたような木、いずれも自然と違和感なく一体化した点に特徴がある。

続いて、処女作「神長官守矢史料館」にはじまる一連の藤森流建築の紹介を通して、自然素材との格闘の個人史が語られた。処女作で早速採り入れられた自然素材は、モダンなデザインでの実現に違和感を覚え、歴史を引用して民家風を試みたものの、“バイパスの蕎麦屋”に墮すことに気づき、思案の末にたどり着いたものだったという。地元で古くからある素材と工法を用いた鉄平石葺きの屋根・割り板と土塗の壁がそれである。そしてそれを素人ができる範囲で加わり共同で造ること。

しかしその表現の意味については、当初、「大切なことを建築で表現しようとしていたのだが、それが何なのか自分でも分からなかった」という。分からないながらも、ホッとしたのは、あろうことか完成した建物への、地元の、「せっかく造るなら、なぜもっと新しいデザインにしなかったのか？」との不評を耳にしてのことだった。試みが違和感なく受け入れられたことの証に聞こえた。友人の建築家・石山修武氏や伊東豊雄氏がその試みを「何か分からないけど、大切なものがありそうだ」と評価したことにも力づけられただろう。

実は、私はこの春、その「神長官守矢史料館」を実際に見ていた（図2）。2年次の設計課題で、「現代の和風」をテーマに取り組み中でたまたま見た雑誌で出くわ

した作品だったのだ。「こんな風に素材を使っても良いのか!」と、その自由さに素直に驚嘆した。それ以来焦がれた訪問であったが、山裾を登っていくとニュッと現れるその姿は、まるで土地から生えているようで、風雨に晒され土着的な雰囲気も加わっていた。単なる歴史の引用ではないオリジナリティがそこにあった。

講演でのお話からは、総じて「人間にとってあるべき自然との付き合い方」の模索に関心の所在があるように見受けられた。きっとそれは、誰よりも多く建築を見て歩く中で、近代の効率優先によって人間が捨ててしまったものとその尊さに気づいたためだろう。フジモリ建築の、“バイパスの蕎麦屋”に墮ちない、直接的でない引用や、人の暮らしの知恵に学びつつ、「科学技術を自然で包む」姿勢は、大切な何かを取り戻すための意図的な拾い上げの行為であり、その表れに違いない。

そのように多くに感じ入る中で、ただ1点、疑問に思ったことがある。それは、「家を売りに出したら3年買い手が現れない」、「施主が歳をとるとメンテナンスに支障が出る」といった、近代に捨てたものの回復に努めた結果、顧みにくくなった現代に求められる利便にどう応えるか、である。高い趣味性に支えられ、それも建築に欠くべからざる要素と理解はしつつも、もう少し住みに優しくとも良いのではないかと……。

それはともかく講演は、今後の展開を問われて放った先生のこの一言で締めくくられた。「一木をくりぬいて家を造り、手すりとか中から彫り出したい」（図3）。模型としてはすでに実践ずみの一本造りを実現するにはかなりの巨木が必要になるはずだ。それでも一日も早く屋久杉かバオバブに入って豪快に笑う姿を見てみたいと思った。

土地の素材を使って建てること、共同で建てること。素材・工法に挑戦する姿勢を学べて、夢を持つ大切さを知った貴重な機会であった。



図1 講演の様子



図2 神長官守矢史料館（筆者撮影）



図3 夢を語る藤森先生

第56回日本大学工学部学術研究発表会〈建築学部会〉

日時：平成25年12月14日（土）

〈建築学部会 第1会場：7033教室〉

- ・戦後福島県に建設された建築のリスト化について ○速水清孝
- ・構造技師・建築家J. J. スワガーの建築と設計活動 ―日本での活動に注目して― ○小室加津彦, 速水清孝
- ・床衝撃音遮断性能の評価に関する研究 ―対比較法を用いた聴感実験― ○永澤駿, 濱田幸雄
- ・生体音響信号の測定・分析手法の研究 ―ヘルムホルツ共鳴を利用した心拍の無侵襲計測― ○多喜翔一, 濱田幸雄
- ・音楽練習室の音響特性に関する研究 ―既存施設の音響調査結果と改修提案― ○江積亮平, 濱田幸雄
- ・官民協働による街路空間形成に関する研究 ―景観協定策定におけるワークショップの有効性― ○大佐古和明, 土方吉雄, 三浦金作
- ・郡山市重点整備地区における街路空間の緑量と緑に対する心理的評価 ○山田瞭, 土方吉雄, 三浦金作
- ・公園内における移動イスの設置方法に関する研究 ―移動イス置き場設置による公園利用実態の変化について― ○大矢康隆, 土方吉雄, 三浦金作
- ・児童の遊び場に関する調査研究 ―市街地特性と遊び行為の関連― ○中谷哲郎, 土方吉雄, 三浦金作
- ・アルゴリズム的手法で設計された建築のデザインに関する研究 ○新城雄史, 浦部智義
- ―コンピュータプログラムによって設計されたアルゴリズム建築の分析―
- ・準寒冷地における夏・冬のパッシブデザインの統合
- ―その1 ロハスの家3号の夏期計測データと温熱指標の相関分析― ○長内勇樹, 浦部智義, 宮岡大, 田中文
- ・インドの気候区分の違いによる住宅分析 ○三浦洵, 浦部智義, Sanjay PAREEK
- ・景観まちづくりにおける色彩計画に関する検討 ―城下町S市を事例とした景観条例について― ○水野谷梯子, 若井正一
- ・公立小学校の改築プロセスに関する研究 ―福島県S市におけるケーススタディ― ○矢吹朋之, 市岡綾子

〈建築学部会 第2会場：7034教室〉

- ・日本大学工学部製図棟の振動性状に関する研究 ○森玄樹, 千葉正裕, 浅里和茂, 日比野巧
- ・Ant Colony Optimization (ACO) のトラス構造最適化への応用 ○高田潤, Buntara S. Gan
- ・変断面Timoshenko梁の振動特性に関する研究 ○遠山貴嗣, Buntara S. Gan
- ・住宅の基礎と杭頭の摩擦による免震機構の定式化及び解析 ○千葉新, Buntara S. Gan
- ・せん断応力を考慮した平面骨組の弾塑性解析 ―共回転座標を用いた大変形解析に関する一考察― ○野内英治
- ・多自由度振動方程式の縮小復元法に関する研究 ―減衰項を有する線形弾性体の場合― ○倉田光春
- ・要素節点に機構を持つ有限要素法に関する研究 ―材端に機構を持つ梁要素の場合(1)― ○星賢護, 倉田光春
- ・分布機構を有する有限要素に関する研究 ―分布機構を有する片持柱のモード重量解析法(1)― ○高橋佑弥, 倉田光春
- ・壁土の水合せについて ―JASS 15 左官工事― ○浦憲親 (金沢工大), 鈴木祥之
- ・結合材を繊維補強ポリマーセメントモルタルとした繊維補強ポラスコンクリートの曲げ性状 ○十文字拓也, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・異なる長さの棒鋼を埋め込んだ供試体の打継部の長さ比率が棒鋼のマクロセル腐食に及ぼす影響 ○飯野将広, 渡辺宗幸, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・石灰石砕砂を用いたポリマーセメントモルタルの強さ性状 ○八木将太郎, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・Cu-Al-Mn超弾性合金を用いた自己修復コンクリートに関する研究 ○三浦裕騎, Sanjay PAREEK
- ・建築用材料の防火性能に関する研究 ○安藤祐太郎, Sanjay PAREEK

〈ふくしま復興に関する部会：7014教室〉

- ・仮設住宅に入居する避難者の今後の住まい選択に関する研究 ○佐久間皓惟, 浦部智義
- ―福島県内のログハウス型仮設住宅団地を対象とした考察―

大学院特別講義聴講報告

「暮らし方とものつくりの新潮流—ネイチャー・テクノロジー—」(石田秀輝先生)を聴講して

大学院博士前期課程2年 安藤 祐太郎

平成25年11月25日(月)、大学院特別講義が70号館7014教室で行われた。タイトルは「暮らし方とものつくりの新潮流—ネイチャー・テクノロジー—」であり、講師に石田秀輝先生(東北大学大学院 環境科学研究科 教授)を迎えての講義であった。

そもそも、テクノロジーとはどういうことか?役割とは?そのような問いかけに対し、石田先生が述べた言葉は「人を豊かにすること」であった。ここでの“豊かさ”とは、人の欲を満足させること、または、地球環境問題とのことである。日本は豊かさの頂点にいるが日本人の86%が将来に不安をもっているという。この現況を打破するには、考え方の「ものさし」を変えることが重要であると説かれ、一つの国連報告書を紹介した。そこには、地球は今より20年以内に環境問題の悪化により数多くの生命が減ると記されていた。近年、省エネやエコグッズなど環境に配慮したアイデア商品が多々発売されたが、未だに地球の環境は悪化する一方である。これこそが、人類が未だに従来の“ものさし”でしか計っていないことの現れである。しかし、日本人は環境に対する意識は高く、エコ商品を購入する人も多くいるのに、なぜ環境劣化が進んでいるのか。それはエコ商品が消費の免罪符になっているからと説明された。よくよく考えてみると、私自身も省エネのエアコンなどを利用する時、エコだからといつも以上に使ってしまう。この現象を“エコ・ジレンマ”という。結局のところ、日本の技術は世界的に見ても素晴らしいが、使う我らのものさしが改善されない限り、何の意味もないということなのである。

それゆえに、ものさしの改善をどうやって行うのか。まず、人間は便利になればなるほど、前の生活には戻れない生活価値の不可逆性を認めなければならない。上述のとおり、テクノロジーが進化しても人間の考え方は変わらないのであるならば、いっそのことテクノロジーにより人間の考えを変えればよいのではないかと、入浴を例えに問いかけられた。従来の入浴では水を大量に消費するため、2030年には水の供給が不可能になる。入浴回数の削減やシャワーに変えるなどの改善策が考えられるが、それでは楽しみが減るのではないかという疑問が残る。したがって、従来の考えを捨て、新しい考えで物事を考える必要がある。要は毎日風呂に入り、水を使用しなければよいのだ…。そこで“泡のお風呂”が誕生!これは“新しいものさし”で測ったものである。このような将来の制約から今を考えること、すなわち「バックキャスト」という思考法が大事になると説明された。

これらのテクノロジーのヒントとして、石田先生は“ネイチャー・テクノロジー”システムを推奨した。ネ

イチャー・テクノロジーとは、自然や生き物の持つ低環境負荷および高度な機能をヒントに、科学技術や産業にそれを応用しようとする試みである。昔の人はものがなくても楽しかったと言っていた。それはなぜか。一つは自然との関わりが今よりも密接であったことがある。なぜ楽しいか、追求するとあることがわかってきた。一つは利便性が高いと人はすぐ飽きてくる。もう一つは自然に近くに感じるとひとの心が豊かになる。最後の一つは自らを育てることができること。この3つの概念で人の心が豊かになるということであった。これらの概念を明瞭するためにネイチャー・テクノロジーがある。

石田先生から、ネイチャー・テクノロジーの具体例としていくつか紹介して頂いた。そのうちの一つに風力発電があった。従来の風力発電機はある程度強い風が吹かないと発電しない。そこで、自然界に存在する生物で考えてみると、生物の中でもっとも低速で滑空できる生き物であり、わずかな風でさえ浮力に変えることができる生き物としてトンボに着目した。そこで、トンボの羽を分析・研究し、テクノロジーで形にすると微風で発電の可能な発電機が生まれた。これは従来の風力発電を遙かに凌駕する性能であった。

このように、そう遠くない未来である2030年に向けて我々はテクノロジーのあり方を変えなければいけない分岐点に居ると感じた。それは自然の循環の中から見つけ出すにほかないということであり、自然界から学ぶネイチャー・テクノロジーによって“新しいものさし”を取得する必要がある。

最後に、今回の講義を聴講し、今までの“ものさし”では今後変化がなく、環境問題の状況が悪化する一方だと感じた。自然から学び人々の暮らしをよくするためには、従来のものさしを捨て“新しいものさし”で物事を考えなければいけない。これから社会で活動する我々にとっての一つの課題を与えられ、また、その重要性について感じた貴重な講義であった。



石田先生とパリーク研究室
メンバーとの記念撮影



講義の様子

大学院特別講義聴講報告

遠藤勝勸先生・大学院特別講義「見る測る建築の設計」を聴講して

大学院博士前期課程1年 近藤拓馬

平成25年12月18日(水)に45号館3階の製図室にて行われた大学院特別講義は、遠藤勝勸先生による「見る測る建築の設計」と題した講演で、院生・学部生・先生方を含め約60人が聴講した。内容は、建築を実測する際の視点や意義、建築設計の実際についての2つが、大きなテーマであったように思う。

前者については、遠藤先生が菊竹清訓建築事務所の創成期にご担当された作品から近年ご見学された建築まで、数多くの実測したスケッチや図面をA4版サイズにパネル化したものを聴講者が回覧しながら、その時感じたこと・考えたことを臨場感ある語り口でご教授いただいた。

まず、遠藤先生が、演台・マイク・スクリーンといった、いわゆる講演会のスタイルでなく、車座的・生声・小さなパネルの回覧といったスタイルを選択されていることに、相対するもの（今回は聴講者の反応？）を正確に捉え、またご自身の考えを分かりやすく伝えようとする先生の思想が感じられた（図1）。

講演の中でも、実測の意義の一つは、手で描くことで表現力が高まり、その結果、仕事の幅が広がるというお話。それは正確な記録としての意味はもとより、後の自分も含めて人に見せられるスケッチ・図面を描くことが設計者にとって重要なコミュニケーションツールになるという意味では、正確に捉えかつ分かりやすく伝える、という講義のスタイルの話と共通する部分がある。また、今やCAD・CGや模型など様々なツールがある中で、設計者が、（建築主や施工者など）人に建築を伝え説得する方法として、素早いスケッチ・図面の表現力が時として最も効果があるというお話は、未だ演習に過ぎないが設計の授業のエスキスのシーンを思い出すことで非常に実感できる内容であった。

もう一つ、実測を勧める意図は、スケール感を身体に染み込ませる訓練になる、というお話。これは、建築の実測を行うことで、大きな建築でも小さな建築と同じような構成要素があり、それらのスケールを丁寧におさえることで、どんな建築もスケールアウトすることなく認識できるスケール感を実測する側に根付かせる効果があると受け止めた。とかく私たち（学生）は、規模や機能の違いによって興味が左右されがちであるが、そういった見方ができると、新しい建築の見え方ができるのでは

ないか、という意味でも新鮮な内容であった。

遠藤先生の講義は、ディテールについてのお話が時間的にも比較的長かったように思う。即ちそれは、実測のポイントである建築の構成要素を把握する際に、ディテールの理解は欠かせない部分であり、また、そこに建築の工夫と面白さが多く含まれているというメッセージにも受け取れた。実際に講義の終盤では、現代の若手建築家の作品のディテールや、その違いによって似たような空間でも全く違った演出ができることを、その場でのスケッチを描きながらお話しされた。そこに、遠藤先生の数多くの実測・設計によって蓄積された鋭い洞察力と表現力を目の当たりにして、設計を目指す学生の一人として、ある種の憧れを感じた。

建築設計の実際についての話題は、内井昭蔵氏や伊東豊雄氏などが具体名として挙げられていた才能溢れる人材が実務を学び建築を実践した、いわゆる菊竹スクールの刺激的な環境からはじまり、最近に至るまで、豊富な実践のご経験の中から具体的なお話をされていた。それらの話に共通する事項は、私なりに、ある一定以上の能力を持っている前提で、建築設計はその設計プロセスに多くを委ね、その設計プロセスの質は打合せの内容で決まり、その打合せをリーディングするためには周りの人を理解し、人を理解するにはより多くの人に出会う（人脈を蓄積する）ことにあると解釈した。また、自ら動いて経験値を増やすことが重要であるという意味では、前段の建築の実測と共通する部分を感じた。

設計プロセスの話題の中で事例としてお話されていた昔の大型物件で、その当時の確認申請は非常に基本的な図面だけで申請が通り、その後は作りながら設計を考えていたというお話をうかがった。そのお話をうかがった直後は、緩い仕組みにデザインしやすそうな時代の空気を感じたが、この遠藤先生の講義を思い返して見れば、その大きい振れ幅の中で様々なことを決めて行くためには、よりスケッチ・図面によるコミュニケーション力、人を理解する能力が問われていた時代だったのかも知れないとも後に考えた。いずれにしても、それらの力を少しずつでも身につけて行きたいと思えたことが、私にとってはこの講義で得られた大きな収穫であった。



図1
パネルを回覧しながら聴講する学生



図2
遠藤先生がご担当された建築の工程表で設計プロセスの勘所をご説明

平成25年度 日本大学大学院工学研究科建築学専攻 修士学位論文発表会

日時：平成26年2月17日(月) 場所：日本大学工学部 70号館6階 7066教室

1. 米国オレゴン大学における建築教育とキャンパス計画の変遷に関する研究 齋藤怜 (指導：若井正一 教授)
2. インドにおける住宅の住環境に関する研究
－気候区別に見る温熱環境と生活様式について－ 三浦洵 (指導：浦部智義 准教授)
3. 原発避難区域に立地する知的障害者支援施設の再建に向けた調査研究
－応急仮設によるA施設の利用実態と再建計画について－ 阿部圭 (指導：若井正一 教授)
4. 各種建築用材料の防火性能及び熱伝導特性に関する評価検討 安藤祐太郎 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
5. 塩化物イオン固定化材を利用した鉄筋コンクリート構造物用断面修復材料及び工法の開発
飯野将広 (指導：出村克宣 教授)
6. ローマ市の街路空間における探索歩行時の注視に関する研究 薄井謙 (指導：三浦金作 教授)
7. 音楽練習室の音響特性に関する研究 江積亮平 (指導：濱田幸雄 教授)
8. 官民協働による街路空間形成に関する研究
－白河市の金屋町・愛宕町・大工町通り景観まちづくり協議会をケーススタディとして－
大佐古和明 (指導：三浦金作 教授, 土方吉雄 准教授)
9. 戦前のアントニン・レーモンドの設計手法に関する研究
－設計スタッフと構造技師・J. J. スワガーを中心に－ 小室加津彦 (指導：速水清孝 教授)
10. 仮設住宅に入居する避難者の今後の住まい選択の研究
－東日本大震災後の福島県内のログハウス仮設住宅団地を対象とした考察－ 佐久間皓惟 (指導：浦部智義 准教授)
11. ハイブリッド型繊維補強ポーラスコンクリートの開発 十文字拓也 (指導：出村克宣 教授)
12. アルゴリズム的手法で設計された建築のデザインに関する研究
－コンピュータや幾何学によって設計されたアルゴリズム建築の分析－ 新城雄史 (指導：浦部智義 准教授)
13. 基礎と杭頭の摩擦による免震に関する研究 千葉新 (指導：Buntara S. GAN 准教授)
14. グリーン・ツーリズムの視座からみた農家民宿等の利活用実態に関する調査研究
－福島県南地方における農業活性化に向けたNPO法人の取組みを事例として－ 永沢公規 (指導：若井正一 教授)
15. 重量床衝撃音遮断性能の評価手法に関する研究 永澤駿 (指導：濱田幸雄 教授)
16. 鉄骨屋根トラスを有する既存RC造体育館の被害分析 日隈宏法 (指導：浅里和茂 教授)
17. RC梁部材におけるCu-Al-Mn超弾性合金及び自己修復ネットワークシステムの開発
三浦裕騎 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
18. 日本大学工学部製図棟の振動性状に関する研究 森玄樹 (指導：千葉正裕 教授)
19. 福島県内公立小学校の建設プロセスに関する研究
－プロポーザル方式による学校改築計画の検証－ 矢吹朋之 (指導：三浦金作 教授, 市岡綾子 専任講師)

平成25年度 日本大学工学部建築学科 卒業研究発表会

日時：平成26年2月8日(土) 場所：日本大学工学部 70号館1階 7014教室 (五十嵐ホール)

1. テンセグリティ構造の形態創生 岡部武志 (指導：Buntara S. GAN 准教授)
2. トラス構造の研究 栗原弘樹 (指導：倉田光春 教授)
3. 木造柱・土台ほぞ差接合部の実験的研究 千葉優, 小椋茂輝, 浜地謙汰 (指導：野内英治 准教授)
4. トラス置屋根形式体育館における屋根支持部の耐震性に関する研究 齋藤俊雄 (指導：浅里和茂 教授)
5. 一層模型を用いた構造物の減衰評価 須藤昶 (指導：千葉正裕 教授, 日比野巧 助教)
6. ハイブリッド型繊維補強ポーラスコンクリートの開発 佐藤翔太 (指導：出村克宣 教授, 齋藤俊克 助教)
7. 比重及び板厚をパラメータとしたセメント系複合材料の γ 線遮蔽性能実験 横山貴史 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
8. スマートフォン使用者の「ながら歩行」に関する検討 田中啓太, 佐藤寛晃 (指導：若井正一 教授)
9. サービス付き高齢者向け住宅に関する研究 飯岡拓巳 (指導：松井壽則 准教授)
10. 住まいにおける子ども室の位置付けに関する研究 伊藤淑恵 (指導：浦部智義 准教授)
11. 小学校のオープンスペースにおける家具の設えに関する研究 佐藤いちか, 守岡優里 (指導：市岡綾子 専任講師)
12. アーケードのある街路の空間構成に関する研究 (仙台 2013)
村松良祐, 高橋幸司, 渡邊優人, 山口高志 (指導：三浦金作 教授)
13. 公園内における移動イスの設置方法に関する研究 相楽拓巳 (指導：土方吉雄 准教授)
14. 東日本大震災に伴う福島県の歴史的建造物の被害と修復に関する調査研究 渡邊潤 (指導：速水清孝 准教授)
15. 神社建築における造形と装飾手法に関する一考察 鈴木翔子 (指導：大山亜紀子 助教)
16. アンカーボルトのがたつき検出方法に関する研究 大島啓介 (指導：濱田幸雄 教授)

学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

- ・芳賀沼整, 石坂公一, 浦部智義, 「ログハウス型仮設住宅の特性と可能性に関する研究—東日本大震災後の福島県内の木造仮設住宅を対象とした考察—」, 日本建築学会計画系論文集, No.696, pp.355-362, Feb.2014.
- ・村上晶子, 湯本長伯, 「教会建築設計資料形成のための音・光環境に関する実測報告—キリスト教会建築における都市—建築—環境システム概念の研究」, 日本建築学会技術報告集, Vol.20, No.44, pp.247-255, Feb.2014.
- ・速水清孝, 「東日本大震災に伴う福島県の建築物の公費解体と修理補助について」, 日本建築学会技術報告集, Vol.20, No.44, pp.363-366, Feb.2014
- ・浦部智義, 芳賀沼整, 滑田崇志, 「復興に向けた住環境デザイン—仮設住宅からの暮らし方の選択肢—」, 農村計画学会誌, Vol.32, No4, 「大震災復興特集/特別論考:農村計画学深化」, pp.471-473, Mar.2014.

学 術 発 表

* 届け出があった記事を掲載

■日本都市計画学会東北支部研究発表会

日時: 2014年3月1日 会場: 東北大学川内キャンパス

- ・ワークショップによる景観協定策定支援 ○大佐古和明, 土方吉雄, 三浦金作
- ・公園内における移動イスの設置方法に関する研究—移動イスの配置方法による利用比較— ○大矢康隆, 土方吉雄, 三浦金作

■八木将太郎君(出村研・M1)は、9月11日、2013年度日本建築学会大会(北海道)学術講演会における研究発表に対して、材料施工委員会若手優秀発表を受賞した。

■阿部直人非常勤講師は、11月30日、伊達市立保原小学校講堂で開催された、伊達クラフトデザインセンター(DC2)主催の「木を使う新しいビジネス発信!木づかい啓発セミナー」において、パネラーとして参加し講演された。

■倉持幸由非常勤講師他5名が共同で執筆を担当された書籍「誰にでもわかる建築施工」が、11月30日、株式会社彰国社より発行された。

■出村教授は、12月13日、日本大学工学部学部長選挙にて、3期目の工学部長に再選された。

■浦部准教授は、1月6日、矢祭町より矢祭町立統合小学校施設整備工事等基本設計・実施設計業務委託公募型プロポーザル審査員を委嘱された。

■水野谷梯子研究員(若井研)は、1月8日、白河市より屋外広告物のあり方検討懇談会委員に推薦された。

■三浦教授, 土方准教授, 市岡専任講師は、1月9日、福島県より福島県景観アドバイザーを再度委嘱された。

■パリーク准教授は、1月10日、建築研究開発コンソーシアムの積層複合材料を用いた建築内部空間の火災安全性に関する研究会の委員に委嘱された。

■1月17日、平成25年度第30回福島

県建築文化賞の表彰式が杉妻会館にて行われ、秋月直道非常勤講師が設計された会津能楽堂(会津若松市)、鈴木勇人非常勤講師が設計された飯坂温泉旧堀切邸(福島市)がいずれも特別部門賞を受賞された。なお、今年度から創設された復興賞には、工学部内のロハスの家群(プロジェクトチーム:浦部准教授他)が受賞された。

■土方准教授は、1月22日、福島県より地域づくり交流会「歴史・景観を生かしたまちづくり」のアドバイザーを委嘱された。

教室ニュース

■土方准教授は、1月28日、公益財団法人区画整理促進機構より新地駅周辺市街地復興整備事業の工事等に関する包括委託業務プロポーザル審査委員会委員を委嘱され、委員長に選出された。

■土方准教授は、1月31日、福島県よりふくしまユニバーサルデザイン推進会議の委員を委嘱され、会長に選出された。

■浦部准教授は、1月31日、「KAMASHIの箱」プロジェクトチームとして、釜石市長より復興まちづくりへの貢献に対する感謝状を頂戴した。

■土方准教授は、2月5日、田村市より、田村市都市計画審議会委員・会長に再任された。

■土方准教授は、2月10日、24日、3月10日、郡山市より郡山市中心市街地まちづくりアドバイザー派遣事業により講師を依頼され、「地域コミュニティの維持と新たなルールづくりに向けて」と題する講話及びワークショップの企画をされた。

■若井教授は、2月14日、白河市より都市計画審議会委員を委嘱された。

■日本建築学会「建築雑誌」2014年3月号特集『震災3年目のパースペクティブ』に、「福島を抱える課題」と題して土方准教授、「福島における復興に向けた住環境づくりの考察」と題して浦部准教授が寄稿された。

■3月12日、日本建築学会主催の東日本大震災3周年シンポジウム「震災復興の支援に関するタスクフォース」活動報告・福島県セッションにおいて土方准教授が司会、市岡専任講師が記録、浦部准教授がパネラーを務められた。また、シンポジウム報告書に、「福島の現況と課題」と題して土方准教授、「避難生活と二地域居住」と題して浦部准教授が芳賀沼整氏、滑田崇志氏と連名で寄稿された。

■若井教授は、3月17日、日本人間工学会東北支部主催の研究会「人間工学@東北地方」において、「身体周囲に必要なアキ寸法の計測」と題して講演された。

平成25年度 卒業式・修了式における表彰者

平成26年3月25日

◇日本大学大学院工学研究科 総代◇ 森 玄樹

◇齋 藤 賞◇

修士論文「ローマ市の街路空間における探索歩行時の注視に関する研究」

薄井 謙 (指導：三浦金作 教授)

◇北 桜 賞◇

修士論文「基礎と杭頭の摩擦による免震機構に関する研究」

千葉 新 (指導：Buntara S. GAN 准教授)

修士論文「戦前のアントニン・レーモンドの設計手法に関する研究」

ー設計スタッフと構造技師・建築家 J. J. スワガーを中心にー

小室加津彦 (指導：速水清孝 准教授)

◇優 等 賞◇ 大石一満, 篠井 涼, 児玉亜由美

◇工学部長賞◇

学術・文化部門：阿部圭 日本インテリア学会第25回大会論文発表優秀賞

研究発表題目「福島県内に立地する屋内子ども遊び場の利用実態に関する研究その2」

学術・文化部門：樋口卓史 第17回 J I A 東北建築学生賞 (社団法人日本建築家協会東北支部主催) 優秀賞受賞

作品名「都市の茶の間」

学術・文化部門：星陽太郎 第17回 J I A 東北建築学生賞 (社団法人日本建築家協会東北支部主催) 奨励賞受賞

作品名「修験道資料館ー見る・歩く・感じるー」

学術・文化部門：佐久間皓惟・佐藤伸哉 「景観開花。9」 (公益社団法人土木学会景観・デザイン委員会他主催)

佳作及び特別協賛企業賞受賞 作品名「壁と生きる通り～3つの壁による防波堤との付き合い方～」

学術・文化部門：遠藤一成・山本彰記 これからの浜屋敷～古民家を生かしたこれからのまちづくり事業提案～

(特別非営利活動法人 吹田歴史文化まちづくり協会主催) アイデア部門優秀賞受賞 作品名「つながる屋敷つなぐ人」

学術・文化部門：古保甲太郎・前田建都・三代川昌礼

笠間稲荷門前通りポケットパークデザインコンペ (笠間市主催) 最優秀賞受賞 作品名「和」

◇父 母 会 賞◇ 小林拓也, 佐藤結子

◇桜 建 賞◇

卒業設計「聴衆の誕生 ー音・楽の器ー」

小林拓也 (指導：浦部智義 准教授)

卒業論文「トラス構造の形状とその地震動応答性状に関する研究」

栗原弘樹・齋藤証紀・佐藤直人 (指導：倉田光春 教授)

卒業論文「セメント系高密度材料のγ線遮蔽性能実験及び基礎的性質の検討」

横山貴史 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)

卒業論文「小学校のオープンスペースにおける家具の設えに関する研究」

佐藤いちか・守岡優里 (指導：市岡綾子 専任講師)

卒業論文「神社建築における造形と装飾手法に関する一考察 ー近世福島県の事例を参考にしてー」

鈴木翔子 (指導：大山亜紀子 助教)

平成25年度卒業設計コンクール・展示会等出展作品

今年度の卒業設計展は2014年2月5日(水)～7日(金)の3日間に亘り、70号館1階7012・7013教室にて開催され、例年を上回る40作品が出展した。2月6日には J I A 東北支部に所属する地元建築家との語らいの場も設けられ、有意義なディスカッションが行われた。2月7日には、終日によるプレゼンテーションが行われ、午後には、選抜された15名による公開プレゼンテーションが実施された。また、2月18日(火)～20日(木)の3日間にはビッグアイ6階を会場に、展示会への出展作品を含む全8作品による学外展示会を開催した。

展示会等出展作品一覧

■日本建築家協会「卒業設計コンクール2013」

小林拓也 (指導：浦部智義 准教授)

作品名：聴衆の誕生 ー音・楽の器ー

■レモン画翠「第37回学生設計優秀作品展」

佐藤伸哉 (指導：浦部智義 准教授)

作品名：立体アーカイブス ー福島に残されたものー

■近代建築「卒業制作'13」掲載

山本彰記 (指導：浦部智義 准教授)

作品名：集線街 ー都市の履歴をつなぐ交錯空間ー

■日本建築学会「全国大学・高等専門学校卒業設計展示会」

樋口卓史 (指導：浦部智義 准教授)

作品名：移動と集約 ー密度の設計ー

■日本インテリア学会「第21回卒業作品展」

水梨榛香 (指導：速水清孝 准教授)

作品名：海の片思い ー人と海をむすぶー

学外展示作品

伊藤 隼 (指導：速水清孝 准教授)

作品名：現代の城 ー都市の核を掘り起こすー

大輪夏美 (指導：浦部智義 准教授)

作品名：跨ぐ街並 ー車からのまちなか再生ー

星陽太郎 (指導：速水清孝 准教授)

作品名：人と自然、忘れられた記憶

ー会津より、修験道の力を借りてー